

講演

## 現代社会におけるエコエティカの使命

今道 友信

ただいまご紹介にあずかりました今道友信と申します。今日はお忙しいところ、「現代社会におけるエコエティカの使命」という講演において下さいまして、ありがとうございます。

早速話に入ることに致しますが、お手元に一枚の資料をお配りしていますが、それに従って、できるだけわかり易く、現代社会において私の考えておりますエコエティカ (eco-ethica) の使命がどういふものであるかということをお話ししたいと存じます。

最初に、「現代社会」について考えてみますと、現代社会というのは、文化においても文明においても非常に高度化した時代であるということ、これは今さら私どもがいちいち検証しなくとも言えることではないかと存じます。不治の病と言われている病気にはさまざまなものがございますが、つい二、三〇年前までは、その当時からい病と言われていた病気 (lepra, leprosy) もその一つでした。私の青年時代には、御殿場とその病気の専門の病院があり、岩下壮一神父という非常に立派な司祭がその病院の院長を務めておられました。今は全快して社会復帰もできるようになっておりますが、当時はその病気にかかると、全治する見込みはないと言われておりました。中世時代から対症療法として、大風子油だいふうしゆの注射が行われておりましたが、その注射をなさるお医者さまも、相変わらずこのような方

法で意味があるのだろうかと疑いをお持ちになっていた、そういう不治の病だったのです。そういう病気が、プロミンなどの新薬によって全快するようになったということは、たいへんなことでございます。また、月に行ってその上を人間が歩いたということもありましたが、二〇世紀前半で、誰がそのようなことが実際に起こると考えたでしょうか。二〇世紀前半は、どれほど夢見る子供であっても、月の上に人間が実際に立つという物語は書けなかった時代であったと言ってもよいでしょう。それが、同じ世紀の半ば過ぎには、人間は月に行つて歩いたのです。そして今では、地球上で天気予報が高い確率で当たるようになってきました。それは宇宙衛星を打ち上げ、そこから得た情報を基に予想するからだということになります。文明については、私どもは今までのどの世紀よりも優れた時代に生きているのであり、本当に幸せだということを実感せざるを得ません。

それから、文化について申しますと、何としても私どもが誇つてよいことは、人権の確立でございます。五、六〇年ほど前には選挙への女性の参加は許されておりませんでした。それから、学習権と申すとおかしいのですけれども、そのようなものも女性にはありませんでした。東大、京大、あるいはいろいろな大学の規則を見ましても、「女性入るべからず」などとはどこにも書いてはいないのですが、女性の方が遠慮なさったのか、男性の方が恐い顔をしていたのか、とにかく当時は女性の入学者はいなかったのです。東北大学や九州大学には女性も入学していましたが、それは例外としてでした。多くの方は、その当時すでに日本女子大や東京女子大があったではないかとおっしゃるのですが、あれは文部省の大学令には妥当しない、つまり中等学校からすぐに入れて、しかも三年間ということで、卒業しても学位はもらえなかったのです。そのような時代のことを考えてみますと、現代は、男女の平等だけではなく、身体障害者でも能力さえあれば立派に就職し、社会活動ができる時代になってまいりました。一昔前には、特に、いわゆる田舎では、家に身体障害者がいますと、名門の家では家門の恥として家の中に閉じこめて外には出さなかったと言われておりますが、今はそういう

ことはなくなりました。ですから、現代社会は文化・文明が高度化した時代であるという自覚を持つてよろしいでしょう。

現代社会の高度化の代表として、私は今簡単に、文化の誇るべき点として人権の確立、文明の誇るべき点として、医療技術も含めた科学技術の長足の進歩について述べたのですが、その現代社会にも大きな矛盾がございます。それは、この優れた文化と文明の衝突と言ってもよろしいでしょう。文化の誇りとしての人権、その基礎は申し上げるまでもなく、人命でございます。しかしその人命が、文明の誇りとしての科学技術の最たる姿であるミサイルや原子爆弾といったものによって奪われてしまうのです。文明の優れたものが、人命を助けるどころではなく、人命を奪う殺戮兵器になっているのです。そして人類の歴史が始まって以来、最も多くの、そして最も残酷な殺戮がくり返されているのが、二〇世紀から今年で六年目となった二一世紀の間であるということ、私どもははっきりと見定めなければなりません。広島や長崎における原子爆弾の残酷なあり方というのは、まことに酷いもので、これは次世代にまでも禍が及ぶような恐ろしい兵器でした。そのうえ、そこには古い騎士道や武士道が守ろうとしていたこと、つまり女、子供には手を出さず、老人にも手を出さず、病者にも手を出さずということ、初めから問題になりませんでした。生まれたての赤ん坊であろうと何であろうと、無差別に殺す、そういうやり方でした。そして、このようなことを言うとき私ども日本人は自分のしたことを忘れておりますが、世界で最初に大都市の無差別爆撃をしたのは、つまり中国が首都を北京から西の方の重慶に移したときに、その首都を「無差別爆撃」という言葉を使って攻撃したのは、他ならぬわれわれ日本人でございますから、先駆者が後から来た原爆に対して非難することは、本當ならできないのでしよう。

とにかくそのようなことを考えながら、プリントの2のCの二行目をご覧ください。一六世紀一六〇万人、一七世紀六一〇万人、一八世紀七〇〇万人、一九世紀一九四〇万人、二〇世紀一億七八〇万人

と記してございます。これは何の数かと申しますと、戦死者の数です。有史以来、一九世紀までの戦死者の数と、有史以来ですら正確な統計はとれませんが、二〇世紀から二一世紀の現在までのわずか一〇五年あまりの間の戦死者の数を比べると、どのような歴史家も一致して認めることは、この一〇五年間の戦死者の方が圧倒的に多いということです。やや現実味を帯びている計算で申しますと、二〇世紀から昨年までの一〇五年間の戦死者の数は、一世紀から一九世紀末までの一九〇〇年間の戦死者の数の約三倍ということになります。もちろんこのようなことを申しますと、人口が六〇億を超えているのだから、戦死者が多いのも仕方あるまいという意見もございしますが、そういう問題ではないと思います。それに数が多いばかりではありません。殺戮の方法が残酷になっているのです。口では人権などと言いながら、誰も人権について何一つまともに考えていない、そういう時代に私も生きていたのだということをはっきりと認めなければなりません。もし人間に同時代者としての誇りや喜びがあるのでしたら、同時代者としての恥や悲しみもなければなりません。

倫理の源は「汝殺すなかれ」ということだと思いますが、それはどうなってしまうのでしょうか。しかも、人間以外の動物で、同じ種類の個体間で、訳もなく道具を使って殺戮しあう動物はいないだろうと言われています。あのゴキブリでさえ、ゴキブリがゴキブリを食べるというのは、余程のことだと言われています。たぶん同種間で食べ合うことがないというのは、倫理的な価値判断ではなくて、生きるうえで同種のもの匂いか味には嘔吐のようなものを感じるというようなことがあるからでしょうけれども、しかし考えてみると、人間は本当に何という存在なのでしょう。

このように考えてみますと、私どもの世紀は確かに優れた時代なのですが、倫理不在の時代なのではなからうかと問うてみてもいいかもしれません。もちろん、現在ではいろいろな職場で倫理が制定されておりまして。たとえば、国家公務員倫理法などというものが制定されておりますが、これは本来あり得ないことです。つまり、法が倫理を規制するというようなことはあってはならないことなの

です。なぜなら、本来、倫理こそ法を規制していかなければならないからです。そしてこの法案が成立するときに、日本中で、政治家もこのころは倫理意識が出てきたと言ひ、そして政治家のすることなら良いことであれ悪いことであれ、とにかく何か批判的な言辞を弄さないで済まないジャーナリストたちも、政治家もようやく倫理に目覚めたと言つて褒めておりました。「倫理法」などという国辱的な名詞を作り上げて、国辱的な非論理的な決定をした国会を日本中が褒めようとしたということ、日本中が倫理の重要性というか、文化的な優位性、あるいは基本性、絶対性を忘れているというほかないと思ひます。

また、各企業の内部でも今、倫理綱領が作られておりますが、それは倫理ではなくて服務規程に過ぎないものだとこのことをはっきりと考へなければなりません。もちろん、倫理的な意識で服務規程が作られることは歓迎すべきことです。私も、私もは服務規程を作成しているその方々の努力を大事にしなければなりませんけれども、それを倫理という名前で押し通そうとしている企業自体も、企業に限りませんが、そういう団体自体も、また、それを認めようとしている世間自体も少し頭がおかしいのではないかとこのことを反省しなければなりません。

仮にも倫理という名前が述べられるならば、そういう規定を作る時には、少なくとも倫理を勉強した人、あるいはそのことについて見識の高い人を一人か二人は入れて綱領を定めるのでなければ、倫理の名前には当たらないと思ひます。私も、私もは軽々しく「倫理、倫理」と言っておりますが、倫理という言葉は、エシックス(ethics)という英語と同じ意味であり、エシックスというのは正しく訳すと「倫理学」でございまして、単なる道徳意識とは違います。ですから本当の意味でわれわれの時代が倫理不在の時代であると言う前に、私どもの国は倫理意識不在の国になっていないかと言わざるを得ないような気が致します。

例えば人間の倫理の中で基本的な社会倫理として学ぶべき徳目がございまして。その基本的な徳目は

何と何であるかということを開いてみましょう。特に社会に生きているものとしての基本的な倫理徳にどのようなものがあるか、お考え頂きたいと存じます。皆さんにお考え頂いて、密かにノートの端などに書いて頂くということも面白いのではないのでしょうか。面白いと申しますのは、皆さんのお考えがこれから私の申しますこととどの程度一致するかしなかがわかるということでございます。私もいろいろな倫理学の勉強をして、倫理学の講義などをなさっている方々に伺うことがあるのですが、日本の倫理学の先生方の殆どは今から申します基本的な徳目を知りません。これは非常に残念なことです。そんなものは知らなくてもいいことなのでしょう。しかし、知るべき古典というのがございまして、それはそれでしっかりと勉強し、それでは及ばないものを私どもは考えていかなければならないかと思えます。

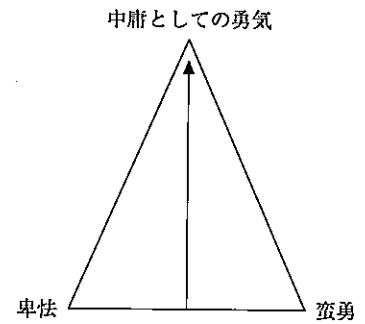
それで、プリントの3の一番下にFというところがございますが、そこに人間の基本的徳目とは何かとして、1、2、3、4と書いております。まず1のところは「正義」をお書き頂きたいと存じます。2のところにプルデンティア(prudentia)とラテン語で書いてございますが、ここは「賢慮」でも「中庸」でも結構でございます。3番目のフォルティトゥード(fortitudo)には、「勇気」あるいは「剛毅」が当てはまります。普通は「剛毅」なのですが、剛毅と言ってもなかなか通じない時代となっておりまして、どちらでも結構なのですが、「勇気」とお書き下さい。そして4番目は「節制」でございます。お砂糖を摂りすぎてはいけないという、あの「節制」です。

今、四つの徳を申しましたが、定義を知らなければなりません。正義とは何であるかということですが、皆さんご承知のように、選挙が始まりますと、代議士の候補者は自分こそは正義を実行する正義の味方である、あるいは若い人にも受けようと思つて、「正義の味方、スーパーマンとは私のことではありません」というような演説をする人たちが沢山いて、私のクラスメートの中にも何人かそういうふうにして代議士になった人がおりました。そのクラスメートももう引退しておりますが、彼らが全盛

時代にずいぶん威勢良く「正義、正義」と言っておりましたが、彼らに正義とはどのように定義できるのかと尋ねますと「正義というのは正しいことに決まっている」と言うのです。「では正しいこととはどういうことだ」と言いますと、「それは正義に決まっている」と答える。そういう程度で「正義、正義」と言っているのですから、社会正義と言つて彼らは何をするつもりだったのだろうと思えます。正義の基盤となるものはどういうことかと申しますと、事物が公平に分配されるような社会があれば、それは正義が実現されている社会と言つことができると申します。この場合、「平等」ではなく、「公平に」というところに意味がございまして。

それから、2番目の中庸や賢慮は何でしょうか。「過ぎたるは及ばざるが如し」ということわざがございますが、過度であつてもいけない、それから少なくともいけないということになります。人々の中には、何かし過ぎててもいけない、何かし損ねてもいけない、それなら何もせずにとじていれば良いではないかと考える人もいますが、そうではありません。「暴虎馮河」と言つて無闇と元気で虎を捕まえたり、黄河を徒歩で渡つたりというような無謀なことをすることもなく、そうかと言つても何もしないでじっとしていることでもない。中庸というのはどういうことかと申しますと、これは非常に大事なことです。し過ぎてはいけないからと言つて中途半端にするのではなく、目標は頂点にあるのだということ。何もしないのではなく、できるだけ立派なことをして、し過ぎるのではなくて、頂点を極めること、これが中庸だということです。ですから、中庸というのは、例えば、労働条件を過酷にしてはならないが、全く放任であつてもならず、適度の労働条件を確定して、効率を上げることが、雇い主の中庸だということになりますから、そう簡単なものではありません。図示します(次頁)。

では、剛毅とか勇気とかいふのは何でしょうか。皆、勇気というのは敵に後ろを見せないことだと言うのですが、それなら平和の時に勇気は要らないのかということになります。勇気とか剛毅とかい



うものの定義はあって、その基本になるものは何かと申しますと、自分が是と信ずることを、自分が本當に省みてこれはもう是認しなければならぬ、これは正しいのだ、と思うことをためらわずに発言することです。これが勇氣なのです。

4番目の節制ということは何か、これはここで私が申し上げることもなく、皆さん、ご存じでしょう。食べ過ぎてはいけない、そうかといって食べなくてもいけない、というのではなく、摂るべきものを適度に摂るといふようなことでございましょう。

基本的な四つの徳について申しましたが、もし正義が実践されている世の中であれば、つまり、もし物資が公平に分配されているような世の中であれば、そして本當にそのことをみんなが意識しているならば、餓死者は今よりは減っていることでしょう。言い換えますと、今世界中に餓死寸前の人々は非常に多くて、私も時々テレビジョンなどでそのような悲惨な状況の国々の貧しい子供たちの姿を見ますが、物を配る人たちが来ても、手を出して良いのか悪いのか、手を出したら叩かれるのではないかとも思っているような疑い深い顔をしながら、欲しいけれど手を出し渋っているような子供の表情などが放映されていると、本當に何と言ったらいのか、哀れで身も世もないような気持ちになることがあります。その反面、旅行案内といういろいろな雑誌などを見ますと、一人一食二〇万円もする豪華な食事を出す料亭と言いますが、旅館もございませぬ。しかもそこが予約でいっぱいになっているという記事なども目に致します。本當か嘘かわかりませんが、とにかく、世の中に流布している旅行案内にそう書いてあるのですから、そういう食事を提供する場所もあるに違いない。こういう記事を見ますと、豪華な食事を楽しむ人々の他方に餓死寸前の人々の多数いる世

の中というのは、確かに何か間違っているような気が致します。多少の贅沢は時により必要でしょうが、限度というものはあります。

さて、一八九八年、つまりちょうど一九世紀の終わりにロンドンで、一日に二件自動車事故が起き、二人が死亡したという記事が出て、それがロンドンの市民ばかりではなくて、ヨーロッパ中でショックとなったことがあります。これから日常的に使用するかもしれない交通の道具となるものは、それほど恐ろしいものなのかと、人々は驚いたのです。馬車での事故で人が死ぬことは滅多になかったのではないかと思います。それに比べて自動車では、一日に二人の事故死者があった。今は事故死者は非常に多くて、日本だけでも、年間に二万人の死者が出るそうです。統計をとる方の言葉によりますと、即死か、事故後の処置から二四時間以内に亡くなった人だけを事故死者として計算に入れるということですから、事故後二四時間以上後に亡くなったという「隠れ事故死者」もいるわけですから、交通事故が原因で亡くなった年間の人数がどれほど多いか、そして日本だけでなく、他の国も入れて考えたらどれほど多くなることでしょう。その原因に目を向けますと、大部分が居眠り運転と聞きますので、結局、労働条件が過酷であり過ぎること、それから運転手が油断してお酒を飲んだために事故を起こすということもございませぬから、雇用主の管理や注意が足りないということも言えるでしょう。ですから、やはり中庸を守れば交通事故死は今よりも減るだろうと言ってよろしいかと思えます。

第三の勇氣ですが、自分が是と信ずることをためらわずに発言することが勇氣だとして、私の青年時代を振り返ってみましょう。私が小学校の上級生の頃から大学の学生の頃に至るまでの一五年、戦争でなかつた年はなく、一五年戦役という名前を使っても良いような、そういう戦時中に私は育ちました。けれど、私どもの家族はごく普通の家族でございましたが、家族の中で誰一人として戦争を続けなければいけないとか、満州事変は正しいとか、あるいは鬼畜英米という言い方は本當だとか、そ

のようなことを言う者は一人もいませんでした。親戚の中には軍籍にあった将校などもおりましたが、そういう将校でさえ、どうも最近の軍人は世界の情勢を知らないのではなからうか、というようなことを言っておりました。また別の親戚は海軍の軍人でしたが、第一次大戦以後、他の国はみな飛行機を作っているのに、日本の海軍は巨艦好きで大きな戦艦ばかり作っているが、敵の飛行機が一番爆撃しやすい戦艦を作って戦争をするつもりだろうか、とまで言っておりました。しかしその人々はある箇所だけ「これはうちだから言うので、よそで言ってもいけない」と断りを言いました。そして父母も子供たちに「あまりよそで勝手なことを言ってもいけない」と口止め致します。結局、皆ひそひそ話をしていたのです。もしあの時、本当に国民に勇気があって、是と信ずることをもって大きな声で言っていたら、少なくとも戦争は途中で負けてもいいからこのあたりで講和しようとか、この辺で引くことを考えた方がいいのではないか、ということになって、原爆の悲劇はなかったでしょう。

また、もっと早くに工場の排気ガスや廃液処理について考えていけば、公害で死ぬ人や難病にかかる人も少なかったとも言えるでしょう。成層圏に穴があくかもしれないとフロンガスの使用を慎重に考えていけば、地球を取り巻く環境破壊がこれほど深刻に私どもに及ぶ前にもっと何とかできたのではないのでしょうか。

ですから、配布プリントの3の一番下、基本的徳目の下をご覧下さい、「正義」の下に「餓死」、「賢慮」の下に「事故死」、「勇氣」の下に「戦死」、「節制」の下に「公害死」と書いてございます。つまり、現代の不幸な、そして時を得ぬ大勢の死者、餓死者、事故死者、戦死者、公害死者というのは、もしも世界中の人が本気になって、正義とは何かということを定義し、勉強し、そして正義に適合物資の配分、公平な配分に努力し、労働条件も過酷にならないようにし、機械を扱う人が自分のセルフコントロールをいい加減にするようなこともなければ、事故死も、絶無にはならなくとも、減るでしょう。それから、誰が自分の子供を国のために死ねと言って戦場に送ることができたでしょうか、

ということをよく考え、自分の身は国に捧げるものなのかどうか、皆さん、本当に勇気を持って語って頂きたいと思えます。そしてまた私は、日本のすべての建物が、ヨーロッパやアメリカなどに比べて電力を使い過ぎると思えます。その結果、原子力発電をしなければならぬというような状態に陥っていますし、甲子園での野球だとかオリンピックなどと云っては日本中でテレビジョンを見ている。使わなくてもいい場合もエネルギーを使い、そのためにどれほどの公害が生じているのでしょうか。この何でもないようなことを通して、一人一人が本当に社会的な節制を考えれば、公害死ということもなくなるかもしれません。少なくとも、その犠牲者が減ることは当然でしょう。私どもの世界は、人間の基本的社会徳目とは何かということを真剣に考えずに、倫理を忘れてしまっていて、便宜のためだけが重視された社会になってしまっている。残念なことです。

このように、古典的な倫理学でさえ、私どもの世界をよりよくしていくために、そのまま役に立つようなところがあるのですが、それならば、忘れられていた倫理を復興すれば良いのか、古典的な倫理学を復興して古い時代の良さを学べば良いのかということになります。そうでしょうか。むしろ、古い倫理は今までの世界には役に立ったかもしれないが、ある程度時代に合わないところがあるのではないかと考えてみなければなりません。

では、今までの倫理でどういうところがおかしいのだろうかと考えてみますと、いくつかのことがすぐ心に浮かんでくると思いますが、たとえば、倫理というのは人の道であって、人類の道でございますから、人は互いに殺し合ってはならないということを厳しく教わります。それでいて戦争になるとどういふ不合理が生じるかと申しますと、人を殺せば殺すほど国家の英雄になるといふことです。倫理はどこにいったのでしょうか。真面目な若者であれば、そのように問うでしょうが、今はそのような余計なことを訊くときではない、国家の危機である、とごまかされてしまう。そのようなこといいのでしょうか。古い倫理というものの飽きたらなさは、論理的整合性が欠如しているということ

です。

確かに古い倫理が近代国家の中で整備されてきた時に、近代国家内部での私闘は、禁ぜられるようになりまし。ですから、江戸時代のような近代国家以前の時には、浅野内匠頭がどのような理不尽なことで切腹を命ぜられ、家臣四十七人が主君のためと言って苦心惨憺して何年間か準備を整えて吉良上野介を殺すというようなことは、武士の世界の叙事詩としては美しいものであり、私どもの気持ちを揺るがすところはありますけれども、そのような私闘を許していたら近代国家は成り立ちません。ですから、裁判制度を確立し、国民同士の私闘による殺傷を禁ずるということになりました。それはちょうど一八世紀の中葉以後、日本では一九世紀の中葉以後になりますけれども、裁判制度を持った近代国家が整備されてからは、国民の間のそのような徒党を組んでの殺し合いというのは、少なくとも、いわゆる文明国においては認められなくなりました。そういう意味では、水戸藩士が自分の殿様の悪口を土佐の藩士に言われたからといって、仮に土佐藩士を殺すようなことがあっても、その者は水戸藩内では忠義者と褒められるというような、おかしいことにはなりません。

こうして、一つの国家の中では一応秩序が守られるようになりますが、倫理というのは、国家の持つ国境を越えるべきであるのに、倫理もいざというとな国の壁の前に無力になります。ですから、エコエティカが必要なのです。エコエティカに対して、何もエコの前にエコをつける必要はないだろうという人もいますけれども、エコをつけるのは、エティカ、つまり倫理とは国家の倫理ではなくて、人間が生きる生活行動範囲全体に及ぶ人類の倫理でなければならぬのです。どれほど今それが難しいにしても、それを求めて倫理を人類のものにしていかなければ、倫理が戦争を是認するような形になっていくのではないのでしょうか。現実の世界の中で、近代が理想とした国家制度があるかぎり、政治が戦争を認めることがあっても、これは反倫理的だが、やむを得ない仕事だという気持ちを持って、少なくとも捕虜を虐待するとか、「戦陣医学」という嫌な言葉がありまして、これは日

本だけではないのですが、捕虜を実験台に使うというようなことは徐々になくなってくるでしょう。

それから、どんなことがあっても次世代にまでも影響が残るような核兵器とか、あるいは細菌による戦いなどというのはやめていかなければなりません。

そのように考えますと、私どもはどうしても新しい倫理を作っていかなければならないということになります。そこで、いずれは考えなければならぬ政治と関わるような難しい問題はさておき、日常生活の中でどのような新しい倫理が今、私どもに必要だろうかと考えてみますと、たとえば、現代社会は技術によってできあがっている社会ですから、その技術が切り拓いてきた生活条件の中で、過去の倫理学では問題にならなかったような倫理的問題がいくつもあります。例えば、今までの倫理学は対面倫理、顔と顔を向かい合わせている、フェイス・トゥー・フェイス (face to face) の倫理でありました。フェイス・トゥー・フェイスの条件がなくなっているわけではありませんが、その倫理は持ち続けなければなりません。ここで隣人愛について考えてみましょう。私どもは隣人愛が大事だとよく耳にします。隣人とは誰のことか。それは隣の人だということにして、好きな人の隣に座って、その人が隣人だから愛するということではありません。運命的に私どもの隣人となる人、その人を自分と同じように大事にすることが隣人愛です。それは分かったと言っても、今、その隣人はどういふものになってきたのでしょうか。

今までの隣人は、比較的近い対面的な距離にあった人だといつてよいでしょう。ですから特定されていて、少数であったと言つてよろしいと思います。私どもが日常に付き合う隣人というのは、ご近所あるいは通勤の途上で会う人、といった顔見知りの人ということになりますから、おのずから、悪い言ひ方をする顔を知られているのですから、なかなか悪事を働くことはできないということになります。しかし、機械の時代になると隣人は変わってきます。電話機で出鱈目に番号を押しても、その番号が偶然通じて、電話が掛かるといふことがあることを考えますと、私どもの今の時代は、不特

定の人と非対面的対話ということが可能となっている世界です。ですから、パリにも自分と同じ電話番号の人がいるかもしれない、どんな奴か知らないが電話して脅かしてやろうというような悪いことでも、やろうと思えばできなくはありません。そのように考えてみますと、私どもの世界では、フランスのような遠いところにいる人でも、機械を通して囁き声が正確に聞こえるような隣人になることができるのです。ですから、非対面倫理の世界に私どもは生きていると言ってもよろしいでしょう。そこから新しい倫理の問題がたくさん出てきます。もしかすると電話番号を間違えて掛けたことよって悲劇をもたらす可能性もあります。夜になかなか眠れない人、不安で眠れない人が、ようやくとうとうとしかけた時に間違い電話で邪魔されるということもあるでしょうし、何の悪意もなくただ友だちに急いで自分の喜びを伝えようと思つて電話を掛けた人が、掛け違えて、ちょうど眠りに入りかけた病人の枕元を電話の音で騒がせてしまうということもあるかもしれません。それがもし重病者でしたら、電話の音に驚いて心臓が止まらぬとも限らない。ですから、機械のほんの一つのボタンを押して違えるだけで、人に不愉快な思いをさせるし、死をも招くかもしれないのです。

そのことをもう少し考えてみましょう。皆さんはすでにいろいろな機械をお使いになるときに感じてみましょうが、モダンな機械になるほどボタンが多くなります。昔、ある外国の航空会社のことですが、エコノミーの中でもさらに安い席がありますので、国際会議に行くたびに、そういう一番後ろの安い席に小さくなって座っておりますと、乗務員が可哀想に思うのか、いろいろな人が同情してくれて、他の客には聞こえないように「操縦席を見せてあげましょうか」と言ってくれて、見せてもらったことがあるのです。今は、ハイジャックの危険もあるものですから、見せてもらえなくなりましたが、操縦席の構造には本当に驚きました。多数のボタンが、しかも同じ形色のボタンばかりが並んでいるのです。小さい字で何か書いてありますが、操縦士はあれを間違いなく押していかなければならないのですから、たいへんなことです。一つ押し間違えたら大事故になるかもしれません。

押し間違えを、実際に私も経験したことがあります。それは、ある外国のホテルでのことでしたが、ホテルのエレベーターに乗っていますと、ドアが閉まる寸前に人が急いで乗り込んで来ようとしたので、開けてあげようと思つてボタンを押したら、非常ボタンだったのです。けたたましい音がして、警備員やロビーにいた人たちが皆飛んできて、「何が起きたのだ」と一斉に言うのです。私は言い出しにくくて小さくなっていたら、ばれてしまつて、「ちよつとそこの日本人のあなた、間違えて押したではありませんか」と訊かれて、「押し間違えました」と正直に言うつと、「ああそれなら良かった」と、咎めを受けずに済みました。あれが夜中だったら、もっと大変なことになっていたかと思ひます。みんな寝巻きで貴重品など置いて飛び出してきたら、その貴重品を取る人だつていたかもしれません。

一つのボタンを押し間違えるとどのようなことになるか分からないということは、今までの倫理学の既定の徳目の中にはありませんでしたが、今申し上げました例からも明らかのように、パンクチュアリティ(punctuality)という必要があるのです。punctualityのpunct-というのは点のこと、つまりポイント(point)のことです。パンクチュアリティというのは、本来はポイントに忠実であるという意味です。ですから、時の点、つまり時刻を約束したのなら、その時刻に忠実でなければならぬのですが、時刻のパンクチュアリティよりも、機械の点、機械のポイントを間違えないパンクチュアリティが大事です。日本では時間に関してのことだけのように考えてしまいますので、あまりパンクチュアリティを強調すると誤解する人がいて、あなたがそのようなことを言うから、何とか時刻表に合わせようとスピードを出し過ぎてJR西日本は事故を起こしたのだ、と言いかねない人も出てきそうです。ですが、私は時間を無闇に厳守しろなどと言っているのではないのです。今の時代の機械構造の場合には、機械のしかるべき「点」を打ち違えたら大変なことになるのですから、機械を扱うためには、今までとは違って、極めて慎重にしなければいけないと言っているのです。だからこそ、機械



の扱い方として、パンクチュアリティを徳の一つとして考えなければなりません。エネルギーが生活の中で大きな位置を占めている今日の世界では、エネルギーを支配しているのは、日常世界では小さなボタンだということを忘れてはなりません。たとえ小さくても、それを押し違えると大変なことになるります。

そうしますと、機械の中の生活の倫理ということを考えるときに、そういう機械の扱い方を表すために言葉を作らなければなりません。どういうことかと申しますと、ギムナスティケーというギリシア語があります。これは、肉体を鍛えるための「体操」と訳します。それと同じように、少なくともある種の機械を間違えずに使えるために、マキナスティケーが必要です。これは辞書にはない言葉です。ラテン語のマキナーナ(machina)、つまり英語のマシーン(machine)は機械ですから、その機械を上手に使えるよう、慣れるために学ぶべきものがマキナスティケーということになります。世界中のすべての機械について学ぶことは出来ませんが、例えば、ご自分の会社や学校やお住まいなどにある機械については、間違いないボタンの押し方を知っておかなければならないということが必要となってまいります。ボタンと機械の機能関係は正確でなければなりません。

ところで、言葉遣いが昔と今では少し変わってまいりました。「わかる」というのは「理解する」ということだったので、今はどうでしょうか。例えば、テレヴィジョンを買い求めますと、遠隔操作のできる、リモコン装置が付いてまいります。店の人は、リモコン装置の説明をして、これを押すとビデオが変わりますとか、これを押すと音量が調節できますなどと言います。それを聞いている人は、「わかりました」と答えます。「おわかりですか、これを押すと音が大きくなりますよ」、「わかりました」、「これを押すとチャンネルが変わりますよ」、「わかりました」と、このようなやり取りがあるのですが、実は何も分かっているわけではないのです。どうしてそれを押すと急にチャンネルが変わるのか、その理由は分からないのです。ただ操作方法を心得たということなのです。私もそうように説明

されると「わかりました」と言うのですが、「心得ました」と言うと、劇か何かに出ているような気がしますから、向こうが「わかりましたか」と言う以上、こちらも「わかりました」と答えるのですが、結局私は何もわかっていません。ここに、認識論の問題が出てまいります。「理解する」ということと同義であった「わかる」ということが、いつの間にか操作方法を心得たことを「わかる」というようになった。でもそれは悪いことというよりも、それほど、操作方法を理解することなしに心得ることが大事な世の中になってきているのです。

以前、電気タイプライターを買ったことがございましたが、その時、専門家でなければわからないようなマニュアル本が付いてきました。私はあれを見ただけでタイプライターが使えるなくなってしまいました。マニュアル本には肝心なこと、つまりどこを押せばどうなるという操作方法さえ書いてくればよいのですが、いろいろな理由などが書かれ過ぎていて、どうしていいかわからない。それで、あるボタンを押したら電気は入りましたが、全然動かなくて、どうしたらいいかわからずに困ったことがあります。今でも、家のビデオデッキの使い方がわからなくて、電気屋さんに頼み、機械に操作順に番号を紙に書いて貼り付けてもらってあります。番号順に押しなさいと言われてるので、暖房機の影響で、しばらくすると空気が乾燥してその紙が剥がれ落ちてしまいますと、もうどうしていいかわからなくなってしまいます。それで物理を勉強している大学生を呼んできて、「どうやったらいいか教えて欲しい」と言いますと、学生は「これは僕の機械と違うからわかりません」と言う。ですから、理解していてもわからないということもあるのです。

では、理解しなくてもわかる方が大事だということはどういうことかと申しますと、私どもは科学技術の世界の中に住んでいます。科学的にはあまり進歩していないということなのです。それはそれでよろしいのですが、とにかく技術の操作方法を間違えずに心得るということは決して等閑に付してはならない、なおざりにしてはならないことであって、今の時代はそういう時代だということ

す。

もう一步そのことについて考えてみますと、今の時代は「形の喪失」とも言えます。自然の世界は形の世界です。尖ったものがあれば、たいいてそれに触れると痛いと思えばいいのです。丸いものであればころころ転がっていくでしょうし、足の長い動物は走るのが速いでしょうし、羽がある動物はたいいて空が飛べるのです。もちろん例外はあります。クチョウなどは羽はありますが、飛べません。例外はありますが、ほとんど形態を見れば機能がわかるのです。「形態は機能を暗示している」というのが自然の世界です。また色彩もある意味で機能を暗示していることがあります。たとえばきれいな色のキノコを見たら、危険だそうですから、食べないようにしなければなりません。足で蹴って変に粉々になるようなキノコがあったらこれも危険だそうですから、食べないようにしなければなりません。皆、形態や色彩でそれぞれの機能を表しているのです。しかし今の人工の世界はそうではありません。たとえば、掌に収まるような小さな黒い四角いものがあつたとします。形をちよつと見ただけでは、それがライターなのか、隠しカメラなのか、隠しマイクなのか、時限爆弾なのかかわりません。構造とということが流行するようになって、構造を理解すればそれが危険なものかそうでないかわかると言われておりましたが、しかし構造でも、構成する物体に伝導体と非伝導体とがありますから、同じ構造でも非伝導体で作られていれば、電気が通じないということがありますから、やはり構造を理解してもその機能がわからないこともありまます。構造もある種の形、内部形態ですから、やはり、形は一切機能を暗示しない時代になってきているのです。それは何を意味するかと申しますと、私どもの周辺にあるいろいろな技術的な道具について、その名称をはっきりと知らない大変なことになるといことです。このことはすでに一〇〇年も前から、薬剤の世界にはありました。薬剤の世界では、それぞれ同じ形をしていてもその働きは全く違うのです。一つは毒であつて、これを飲むと死んでしまう。もう一つは、毒と同じ形をしていても、手術のために必要な麻酔薬かもしれ

ない。ですから、医師並びに薬剤師などの専門家の世界では、形態は直ちに機能を、つまり働きを暗示しないということは常識になっておりました。その「形の喪失」が今や、全市民の生活の中に入ってきているということを理解しなければならぬと思います。

形態ではものの機能がわからない時代になってきているということは、結局、ある意味で私どもは暗箱の中で生活しているのだと言ってもよろしいのです。ですから私どもがお互いに信頼しあつて生きていくためには、機械の操作の仕方や機械の種類などを相手に知らせてあげなければ、相手は不安になるような時代になったということで、そういう意味で付き合いの仕方、昔とは違ったやり方がたくさんあるのではないかと思ひます。

さて、他にどのような新しい倫理があるかと申しますと、空間倫理というのに対して、時間倫理というのが大事になってきました。空間倫理というのは何かと申しますと、私の占有すべき空間に、例えば書齋に、誰かが私の許可なしに入ってくることはある意味では悪いことだと言われています。そして私の支配している空間の中にある机の引き出しを無断で開け、そこにあつた私の財布を、私の許可なく誰かがポケットに入れて出て行くということがあつたとしましょう。これは単に物質の空間的移動なのです。物質運動なのですけれども、その物質が帰属している人の許可なしに第三者がその物質を移動させると窃盗になります。そのようなわけで、空間倫理というのはずつと尊重されてきました。しかし情報機械が発達しますと、空間倫理だけでは不十分になります。情報機械は空間を問題としない機械です。たとえば、後ろの方に座っていらつしやる方にも、前においでの方にも、私の声が同じように聞こえるということは、マイクロフォンという一種の情報機械のおかげです。つまり、そういう機械によって、空間の距離の意味がなくなってくるのです。逆に申しますと、情報機械というのは空間を問題としないかわりに時間に問題にすることが出来ます。わかり易い例で申しますと、例えば、昨夜の九時過ぎ頃というのは腹立たしい限りでございました。ちょうどこの南柏で講演をする

ために一生懸命、勉強しておりました時のことなのですが、話したいことはいっぱいあるのにまず話を圧縮していかなければなりません。このようなつまらないことを言ったのは皆さんのお役に立たないだろうなどと思いつつながら苦労している。そういう時にも電話が掛かってくることもあるのです。仲の良い人からの電話なら嬉しいのですが、「今道先生でいらっしゃいますか。昼間からずつとお探ししておりましたが、お初にお電話致します」などと丁寧に言うのです。そして「もう研究所の方に何度もお電話しました」と言って、急に株のことを切り出したのです。夜の九時半頃だったのですが、よほど売れない株屋なのでしょう、商売熱心で電話を掛けてきた。しかしこちらとしては夜という非常識な時間帯であるうえに、私は仕事の邪魔をされたわけですから、特別に腹が立ったのです。しかし怒鳴ることだけはやめにして、電話を切りました。しかし、電話を切った後も、邪魔をされた嫌な気分はおさまらず、一時間か二時間くらい、むしゃくしゃして何も手につかない、落ち着いて考えることができないのです。

今申し上げた話から考えて頂きたいのですが、都会生活は個人が皆自分の時間を持っている時代になっているのです。ミレーの「晩鐘」という絵がございしますが、あの作品は、夕方六時になって村の教会の鐘が鳴り、二人の若い農家の夫婦が祈りを唱えているという絵です。絵の中では二人しか描かれておりませんが、実際に鐘が鳴ると村中の人が「夕方六時の鐘だ」というので、祈りを唱えて農事を終えて家に帰るのです。朝六時に教会の鐘が鳴ると起きて、ご飯を食べて野良に出る。昼一二時の鐘が鳴ると仕事を休んで食事をする。夕方六時の鐘が鳴ると家に帰って食事を済ませて、一日の疲れを癒す。一九世紀の半ばまでは、世界中、だいたいこのように寺院の鐘が支配して、一律の時間の中に人びとは生きていました。腕時計などまったく必要のない生活です。そういう村に汽車が通るとすれば駅もでき、駅長は時計を持っていなければなりません。そこに小学校ができてくると、学校には時計がなければなりません。工場が建つようになれば、工場内の機械は一時間したらどうなるというよう

に、機械操作のために、みんなが腕時計を持たなければならなくなってくる。このように、都市化によって今は個人が時間を所有している時代なのです。しかも今はみんなが時計だけではなく電話まで持っている時代でもあります。昔なら、夜の九時過ぎに株の電話など掛かってくるはずはなかった。ですから、時計や電話をみんなが持っているということは結局どういふことかと申しますと、すべての人が誰かの時間の中に、その時間の所有者の許可なしに携帯電話で侵入することができるということです。

私も一人一人の時間というのは、その人の一生を形成するものなのです。ですから、あるエコイステイックな電話によって私の時間が乱されるといふことは、私の限られている生涯の三〇分か一時間が、電話を掛けてきたその人によって乱されたと言わざるを得ません。もちろん人から乱されて当然の時間というのはあると思います。仮に私が悪いことをして、そのことのために叱責の電話や、あなたのお陰でこうなったというような苦情の電話があったら、私はそれに耐えていかなければなりません。けれども、ある人が自分の利益のために他の人の時間の中に侵入するといふことは、どういふ時代だから可能かと申しますと、腕時計の文化の時代、そして携帯電話の文化の時代だからです。誰もが誰かの時間の中に入っていくことができる時代に考えておかなければならないのは、個人個人の時間というのは、その集積がその個人個人の生涯になるといふことです。そうしますと、私も、親しい間柄とか本当に孤独で悩んでいる人には勝手にどんどん電話を掛けても良いかもしれませんが、実は空間と同じように電話においても一つの見えない障壁があるべきではないかということを考えていかなければならないと思います。ですから、そういうことを考えますと、今までの倫理学の中に入っていないいろいろな問題があり、それがエコエティカの問題でもあり、皆さんの問題でもあろうかと思えます。

そして、特に私が注意して頂きたいと思えますのは、配布プリントの4にございます。4の2のと

ころに行為の論理構造の逆転による問題というのがございます。人間の行為というのは、人間の行為である以上、考えることと無関係ではありません。それでアリストテレスは人間の行為はどのような論理的な順序になっているかと考えました。あることが望ましい。例えばお金が欲しい(大前提A)とします。するとそのお金を獲得するための手段を列挙するのが三段論法の小前提です。すなわち、お金を可能にするにはどのような方法があるのか、ということになります。それは、働く(p)とか、持ち物売る(q)とか、友達に借りる(r)とか、あるいは副業をしますか、アルバイトをする(s)とか、また盗む(t)というのも一つの方法です。このAを可能にするであろうp、q、r、s、tというのが手段となります。アリストテレスは、手段の中で最も立派で、そして最も容易なものがあればそれを選ぶと言っているのですが、私どもに最もやりやすく、出来るだけ立派なものということを考えてみますと、今の職場の給料では安すぎるが、かといって残業する時間はない、自分が持っている漱石全集を古本屋に売れば少しは金になるかもしれない。このように、qという手段、持ち物の売却からAのお金に達することになります。ここでの責任は個人の問題になります。もし私がその時に盗むという手段を決断すれば、それは私の責任となりますし、古本屋に本を売りに行くのもまたその本人の責任です。

ところが、新しい倫理が論じなくてはならないことがあります。今は巨大な手段が存在する時代です。ある巨大な力Pがあるということです。それはたとえば、国家なら国家資本を持っているとか、企業なら大資本を持っているとか、ある都市なら大きな電力を持っているとか、われわれ個人にはない巨大な力、パワー(power)があります。そのPはどういうことを可能にするのかということ、Pを手段として実現できる目的というのがあるはずで、ですから、仮に大資本を持っているとすると、それで学校を作る(a)とか、多目的ホールを作る(b)とか、さらに資本を投資して別の仕事をやる(c)とか、あるいは病院を建てる(d)とか、いろいろなことができます。ですから、目的

を選択することになります。しかも、その資本の内部でできることなのですから、必ずできるはずで、す。そして、その時に、できるだけ経済的で効果的なものを選ぶということ、Pという力から、cという目的を選択する。これは巨大な力が力として認められる以前の時代には意識されなかった三段論法です。アリストテレスの三段論法は、個人の三段論法として今も生きています。そしてこれは失敗したらその人の責任ですから、レスポンスビリティ(responsibility)がそこに生じます。しかし新しい倫理、すなわち、ある巨大な力Pは私のものではなく、会社が持っている資本だとしますと、その資本で何をやるのかということで、会議が開かれてそこで結論が出て行為に至るとき、前提となるのは目的ではなく力であり、その力が可能にする目的を探すのです。そしてそこで出て来る新たな問題は、失敗した場合の責任のとり方です。成功した場合には、みんなが互いに利益を分け合えばよいのですが、失敗したときにはレスポンスビリティだけでなく、アカウンタビリティ(accountability)が必要になってきます。つまり、投資者、株主に対してどうしてこういうことをせざるを得なかったかという説明をしていかなければなりません。今までの世界は、レスポンスビリティだけの世界であって、アカウンタビリティというのはあまり考えられていません。ですから、アカウンタビリティというのは西洋語ではありませんが、これがどういふものかという意識は、西洋人にも日本人にもよくわかっていない。共同事業と巨大な力が支配して、目的を選択していく社会の中で考えていかなければならない新しい徳目の一つとして、レスポンスビリティと並んでアカウンタビリティとは何であり、アカウンタビリティの構造はどのようにすべきであるか、そして、それによって生じてきた委員会などのような団体は、どのような責任のとりようをするのか、というようなことを考えていかなければならぬだろうと思います。

そのような新しい問題は、実は、情報倫理の中にはたくさんあります。今までの科学の機械、技術の機械というのは、昔の物語の中で人間が欲しがっていたものをすべて現実のものとなりました。例え

ば、空飛ぶ絨毯というのは、飛行機によって実現され、肥後の彦市が木の上から都を覗いていた遠眼鏡は、望遠鏡のようなさまざまな機械で実現されました。どうしても作ることでできなかった隠れ蓑も、インターネットやEメールによって実現されたと言ってもよいでしょう。つまり、インターネットやEメールの世界では、自分の名前を明かさずに、あるいは虚偽の名前を使って、情報を得たり与えたりすることができるのですから、そこでは人の姿は見えないわけです。ですから、本当に倫理意識がしっかりしていなければ、人間の世界は悪が蔓延していく可能性があるのです、今こそ倫理を小さな子供のうちから教えなければならぬ時代ではないかと思えます。

いろいろなことを申し上げてきましたが、まだまだ考えておかなければならないことがたくさんございます。やがて宇宙ステーションのようなところで働く人も多くなってくるでしょう。私どもが今住んでいる世界は、重力の支配を受けておりますから、そこにあるもの、つまり物質は不動です。置いたらそこにあつて動きません。しかし宇宙の、そのような重力の支配の及ばないところで、物質が自由に飛び交うような世界で、どのようにして所有権を認めるのか、あるいは所有権を共同のものにするのかというような問題も出てきますでしょう。そのことよりも、私どもが特に考えておかなければならないことは、文化倫理を始めとして、自然への配慮をしていかなければならないということです。その際、常に人間を中心にした考えを捨ててはなりません。そうしなければ私どもは考えようがなくなつてきます。人間の世界を大事にし、人間同士が殺し合いをしないように生きていくためにはどうしたら良いのか。そうであるからと言って、例えば、臓器移植を簡単にするために、人間に類似したもの、脳のない人間を作つてその臓器を活用すればいいのだということで、人間の形をしているけれど脳のない生物を作つてみるようなことがあつてはなりません。そのような、可能であることが善であるという考えをしてはならない。そうしなければ、遺伝子操作にとどまらず、どのようなことでもできてしまいます。ですから、人間の尊厳について、もつとよく考えていかなければならない

だろうと思えます。今、私ども一人一人がそのようなことを意識し、真剣に考えておかなければ、次の世代はたいへんな時代になってしまうでしょう。

結びとしまして、私はすべての人が「エビメラレア・テース・プシユケース(epimeleia telos psychens)」つまり「魂の世話」をしなければならぬと思えます。これはソークラテースが言った言葉でございしますが、彼は、哲学とは何かというところ、一番わかりやすい定義として「魂の世話」だと言いました。人は肉体の世話と同じように魂の世話をしなくてはならない。肉体の世話のために医学が、つまり医学の常識が非常に大事であつたように、魂の世話のためには倫理学の常識が大事です。ですから、しかるべき古典を読み、ご自分の魂の世話をするとともに、古い倫理だけではなく、今述べてまいりましたように、新しい倫理の試みもございしますので、そのようなものも含めて、倫理学を大事にして、魂を立派に生かせるように、そういう覚悟を自分自身に命じないと、人間として本当に道を踏みはずすことになるのではないかと思えます。

及ばない話でございましたが、静かにお聞き頂いて、誠にありがとうございます。

#### 【質疑・応答】

Q…人間の歴史の中で倫理という言葉とか、倫理という概念がいつ頃出てきたのかというのを教えてほしいということと、あと話の中で知るべき古典というのが挙げられたと思うんですけども、出来たら教えて頂ければと思つていんですけども、よろしくお願ひ致します。

A…ご質問、ありがとうございます。倫理という言葉がいつからできたかということも私も知らないのです。調べようがありませんけれども、しかし倫理学を語るという時にどうしても、人間に注目

しなければなりません。人間に注目した最初の哲学者は、東洋では孔子、西洋ではソークラテースです。孔子は紀元前七世紀頃の人、ソークラテースが紀元前四世紀の人でございしますが、この二人が学問的な倫理という事に目覚めておりました。ですが、ギリシアではその前から、ご承知のようにホメロスの叙事詩がございまして、そこに出てくるアキレウスの非常に公正な態度というのは、倫理という言葉は使われておりませんが、倫理的な、つまり武將として為すべき立派な態度であり、また敵の老王プリアモスに対する態度の謙虚さも読む者の心を打ちます。その場面では、アキレウスとの一騎打ちに敗れて死んだ長子、皇太子ヘクトルの死体を求めにやって来たプリアモスとアキレウスが二人きりになるのですが、アキレウスにしてみれば、老王といえどもプリアモスは敵の大將ですから、首を取ったら大手柄を立てられるのですけれども、そういうことはしません。プリアモスへのそのようなアキレウスの態度は、倫理の模範として語られております。また孔子も堯舜禹三代、つまり自分の時代以前の先王たちの態度が立派であったと褒めておりますので、やはりその王たちには民を尊重する倫理的な態度があったのでしよう。

とにかく正確なことはわかりませんが、学問としての倫理はソークラテースと孔子に始まるとするのが一般的ではないかと思っております。インド仏教の研究者たちも、孔子やソークラテースの出た時代に、世界的に倫理学の始まりのようなものがあったと見ているようです。不十分な答えで申し訳ありません。

それから、どのような古典がよろしいかと申しますと、日本人の場合には、読み方が難しいのですが、やはり『論語』が非常によい書物であると思います。西洋の書物でしたら、やはりソークラテースの登場する、つまり彼の魂についての思想がよく表れている『パイドン』という書物がよろしいでしょう。パイドンというのは人の名前です。それから『ソークラテースの弁明』というのもございします。それからもう少し体系的な勉強をなさりたければ、アリストテレスの書いた『ニコマコス倫理学』というのがあります。ニコマコスというのは、アリストテレスの甥の名前だったと思うのですが、その人が編集したアリストテレスの講義録が今申し上げた書物です。これらはすべて、岩波文庫やその他の文庫にございます。どれも古典ですから、読むにいくところがございますけれども、読むとなかなか面白い言葉があつて、例えばアリストテレスの『ニコマコス倫理学』などには、友情が徳目に数えあげられております。日本では友情というのが徳目と考えられないところがありますが、アリストテレスは友情も徳目だと考えております。友情とは友達への愛ですが、アリストテレスは友情とは何かと定義して、その間柄には法律がいらぬ間柄だと言つてます。『聖書』も、特に『新約聖書』には、イエスの倫理的な教えが含まれています。

古典の言葉というのは、繰り返し読みますと涙が出てくるほど素晴らしいものです。深い意味があります。ですから、古典をいろいろ読み始めてみて、もし面倒になつても途中でやめずに、何か良い言葉はないだろうかと探すだけでも意味があると思います。

Q: 倫理と哲学と道徳の違いが良くわからないので、よろしくお願い致します。

A: ありがとうございます。そのことについてはご説明しようと思ひまして、プリントの4のところを書いておいたのですが、時間がなくなつてしまいましたので、詳しく説明致しませんでした。哲学というのは、倫理を含めております。一応、哲学はソークラテースが「魂の世話」というのが一番わかりやすい定義だと言つておりますので、そのようにしておきます。それで、倫理と道徳の区別を申し上げたいと思ひます。これは大事なことです。先ほども少し述べましたが、日本語では倫理学と倫理というように、「学」がついているのといないので区別がございしますけれども、英語ではどちらもエシックス(ethics)でございしますので、倫理とは学問だとお考え頂きたいと思ひます。ですから学校

で倫理を教えるというときには、やはりそれは理論的な研究です。ですから倫理家という言葉はございません。それに対して道徳家という言葉はあるのです。道徳家というのは、倫理学の課題になるようなことを大切に考えて、そういうものを身につけて、生活している人です。たとえば、目に一丁字も無いと言いますか、まったく本も読めないし、面倒な議論もできないけれども、朝起きてから夜寝るまで人のために一生懸命尽くして、自分の利得などは二の次三の次にしているような人、そういう人を道徳の人、道徳家と呼んでよろしいでしょう。そういう人の中には、倫理的に生きてはいるけれども、倫理学について一言も話せないという人がたくさんいます。ですから、理論的な裏付けなしでも立派に道に適ったことを道徳というと考えてよいのではないかと思います。

それからしつけについても申し上げたいことがございます。しつけというのは大事なものではございますが、ある団体、あるいは、ある組織がその目的を果たすために有無を言わずある者に仕込むことがしつけです。もちろん普通の家庭の中で見てみますと、たとえば、子供が犬のように四つん這いになって食べていると、親が「そんなことをしてはいけません」と言っただけで、右手に匙か箸を持たせて、時には手を叩くことがあるかもしれませんが、とにかく有無を言わず、匙か箸を持って座って、または腰をかけて食べるように仕込んでいくことがしつけです。しかし、非常に危険なことは、しつけがいいと、道徳も倫理も立派だというように誤解する人がいることです。私は倫理や道徳の教育が大事だと常々申しておりますし、道徳の副読本なども書いておりますので、時々、学校などに呼ばれて参りますと、校長先生などは、「うちはしつけがしっかりしておりますから、道徳は大丈夫です。倫理も大丈夫です」とおっしゃいます。確かに学校に入っていきますと、生徒たちは挨拶致します。でも、午後に行っても「おはようございます」と言うのです。恐らくお客さまがいらしたら「おはようございます」と言いなさいと、機械のように仕込んでいるのでしようが、やはりそれは少し行き過ぎではないかと思えます。

私の考えでは、しつけが日本の中で一番厳しく守られている団体は、お怒りになる方があるかも知れませんが、暴力団ではないでしょうか。暴力団は、親分とか若頭とか、よくわかりませんが、組織立っておりますし、親分の代わりに牢屋に入っていく、と言われたら、下っ端が文句も言わずに牢屋に入るとか、言われた通りにできなかつたり、親分に迷惑をかけるようなことをしたら指を詰めるとか、暴力団としてのしつけはしっかり守られています。しかし、しつけは守られていても、非道徳なことをしているのですから、しつけというのはきちんと解釈しないとたいへんな誤りになると思えます。

ですから、何のためにしつけるのか、そういう目的を真面目に学問的に考えるのが倫理で、道徳というのは、理屈はわがらないけれども、人間の本能として立派なものに憧れるような、そういうもので、そのような憧れを持ち続けている人は道徳家と言ってよろしいかと思えます。

Q…弁証法について簡単にお願いしたいんですけれども。それから「魂の世話」について、もう一度詳しく説明して頂ければと思うんですが。

A…弁証法も詳しく申しますと、いろいろなことが出てくるのですが、字のとおりに申しますと、弁証することによって、つまり話すことによって証明していく方法ということです。話すというのは独り言ではなく、二人の人が話し合うことによって真理を見つけていく、あるいはあることを証明していくような方法ということで、ギリシア語でディアレクティケー(dialektikē)と申します。これはもともと「対話を通じての方法」という意味です。日本語ではこれを弁証法と訳しております。日本語には実証的という言葉がございますが、実証というのは実験をして証明していくようなときに使います。例証という言い方もございますが、これは例を挙げて証明するということです。弁証というも

もとの意味は、そうではなくて、お互いに議論しながら証明し合っていくことです。そして、弁証法を大事にして、その言葉を使った最初の人と言ってもいいのはソークラテースだと思います。彼以前にも弁証法を使った人はいると言えますけれど、とにかくソークラテースが最初の人と言ってよろしい。

ヘーゲルの弁証法というのをご存じです。最初、Aという人が「国家が大切である」という命題を言います。これを「正」とします。するとBという人がそれに反対して、「国家は大事ではない」と言う。これを「反」と言います。この両者を合わせて「国家は絶対的なものではなく、単に国民を守るための組織として大事である」という考えが出てきます。この経過を正・反・合と言います。つまりAの理論とそれに反対の理論が闘って、両方の良いところが合わさって第三の考え方が出てきます。これ以上説明しますと時間がかかりますので、この程度の説明で辛抱下さい。そしてこれをご理解して頂いたうえで、哲学事典、あるいは広辞苑というような字引をご覧になると、今までよりはわかりやすくなるかもしれません。

「魂の世話」ということについてでございますが、これはご質問頂いてありがとうございます。

皆さんは、毎日意識していると否とに問わず、体の世話はなさっているのです。毎日、朝、昼、夜と食事をなさるでしょう。これは栄養の摂取です。栄養の摂取ということは肉体の世話にとって大事なことです。しかも摂取する時には、肉ばかりを食べるのではなく、野菜も食べようとか、ある程度の栄養バランスを考えて、栄養が偏らないように気をつけます。食事だけではなく、血圧に気をつけることもございます。私なども血圧計を持っていて、測ってみて正常値が出ますと安心します。正常値がどれくらいかということをおよそではあります。あるいは、頭が痛いから熱を測ってみると38度だ、これしきのこと仕事を休んでなどいられない、というのではないへん

なことになります。38度あればやはり病院に行くとか、解熱剤を飲んで寝るとかして、仕事は休まなければならぬということをおもひ知っています。詳しいことはわからなくても、ある程度の医学の常識ということをおもひ知って、体の世話をしているのです。言い換えますと、体の世話のためには、医学の常識を知らなければならぬということです。

ソークラテースは、「あなたがたは体の世話を毎日しているように、魂の世話をしているか」と訊くのです。魂の世話と言われると、したことがないと言う人も多くいますし、毎日反省していると答える人もいます。しかし毎日反省するというのは、もちろんしないよりは良いのですが、例えば、誰かを痲癩のあまり殴ったけれど、これは悪かった、というような反省は、自分のしたことについての反省であって、「我」というものについての、つまり我が精神についての反省ではないのです。どうしてあんなことで腹を立てたのだろう、自分の精神はどうなっているのだろう、というようなことを考えて、その我が精神なり魂なりを反省するというか、世話をします。そして、どうも怒りっぽいようだが、それはどこから来るのか、謙虚さが足りないからか、単なる痲癩持だからか、どうしたら治るのだろうか、と考えていく。そのようなことが「魂の世話」です。ちょうど「体の世話」をするために医学の常識を知っておく必要があるのと同じように、「魂の世話」をしつかりするためには、ある程度、倫理学の常識のようなことも知っておいたほうが良いだろうということになります。

さきほどご質問頂きましたが、哲学というのは何かと言うと、最初は、今申し上げました魂の世話だということでございます。しかし哲学はこれだけではありません。各人の「肉体の世話」が医学の常識であるように、「魂の世話」は各人の哲学的常識の段階です。学問としての哲学は、もちろん哲学者の研究として書物などにあらわれています。

Q：倫理学と道徳の話が出ましたが、モラルフィロソフィー、道徳哲学というのがあるんですけれど



も、そうすると道徳哲学と倫理学が同じような形になるのか、そしてモラルフィロソフィーとモラルサイエンスと倫理学との関係を教えて欲しいのと、それからエコエティカが環境倫理学とどう違うのか、まったく違うのか、その辺をちょっとお聞きしたいなと思いました。

A: モラルフィロソフィーというのは、モラル、つまり道徳に関する哲学でございますから、結局学問であって、倫理学と同じと言っても良いところもございます。ただモラルという場合には、現実の風習や道徳として行われているものをまず研究するというところが無いといけませんので、場合によると倫理学よりもっと広く人間のさまざまな領域に及び、例えば、北欧の民族にはどのようなモラルがあったのかということの研究するか、朝鮮のモラルと日本のモラルとはどのように違うのかについて研究するのもモラルフィロソフィーです。

モラルサイエンスというのは、フィロソフィーという言葉を使う人がサイエンスという言葉を使う傾向がございますが、サイエンスは、科学ということで、人文科学も科学ですから、サイエンスという言葉から理科的なものだけを考える必要はないのですけれども、例えば、人間の「性」の問題、セックスの問題などを研究する場合には、性の心理学とか性の病理学とかいうようなものも研究しなければならぬということで、モラルサイエンスの中にそのような研究を含める人もいます。ですから、人によって言葉の使い方が違うところがあると思います。もちろん人文科学だけの意味でモラルサイエンスをお使いになる方もございます。でも、基本的にはモラルサイエンスにしても、モラルフィロソフィーにしても、恐らくモラロジーにしても、学問だと思いますので、そういう広い意味では、倫理学と大差はないと思います。

それから、エコエティカと環境倫理学との違いということから申しますが、環境倫理学と言っておられる方は、自然だけが環境と思っている方が多いのです。人間も自然であることを忘れてはならないのですけれども、人間と自然環境という対立で倫理学を考えようとしておられる方が多くて、それはそれでよろしいのですが、私どもの現実の世界では、実は科学技術的な繋がりが環境になつていくということを見過ごしてはならないと思います。もし本当に環境倫理学というものを立てようとするのなら、自然のほかに環境として、今申しました科学技術的な繋がりが、それから文化の繋がりがあるといふことを忘れてはならないと思います。例えば、環境の中に図書館が一つもないような町に住んでいるといった場合、個人的に蔵書をたくさん持っていないと、人間としての教養が保てないのではないかと、文化環境について考えていくということもござります。

現代について考える前に、いつからが現代なのかを考えることも必要です。時代で区切るという考え方がありますが、例えば二〇〇六年から現代が始まったというように簡単に数字で決定するわけにはいきません。そこで、どういう社会が出来上がったからを現代社会と言うかと考えてみますと、テクノロジー、すなわち科学技術が道具であるというその本質的性格を持ったまま科学技術が環境になつてからが現代社会だと言つてもよろしいかと思えます。わかりやすい例で申し上げますと、私が東大の助教になりまして昭和三〇年代頃は、鹿児島大学に出張講義に行きますと、まず電話が掛かってくることはありませんでした。あの当時、東大で何か面倒なことが起きて、鹿児島大学に出張講義に行っているあの助教を呼び戻そうとしても、簡単にはいきません。まず交換に電話を掛けます。意外と東京から鹿児島に電話をかける人が多いらしく、「回線がふさがっておりますので、一時間くらいお待ち下さい」と言われます。気の短い学部長などはこの段階で諦めます。よしんば電話がつながって「では帰ります」と言つても、東京に帰り着くのに二四時間もかかってしまいます。あの頃は、東京から福岡までが汽車で一七時間でした。ですから、鹿児島に行つてしまえば、東京で何が起ころうとも、電話を掛けるのに二時間も三時間も待ち、汽車に乗ってから二四時間もかかるわけですから、同じ日本の中においてもすぐには帰れないのです。今では、パリまで飛行機で一三時間です。そ

れに外国でも通じる携帯電話もごさいます。ですから、外国にいても東京にすぐに呼び戻されることは、経済的な条件を除けば、昭和三〇年代に鹿児島から東京まで帰ることよりも、ずっと容易だと言えるでしょう。このようなことを考えてみますと、自然だけが環境であるという考え方の環境倫理学というのは、環境という言葉が誤解していると思います。

さて、エコエティカの「エコ」は、ギリシア語の「オイコス」という言葉から来たラテン語です。「オイコス」から「オイコ」そして「エコ」となったのですが、オイコスというのは、狭い意味で「家」、広い意味では「生きている場所」とか「行動範囲」ということになります。ですから、エコエティカの「エコ」は、家ではごさいませんで、人間の生息範囲を含んでの行動範囲を意味します。ですから「エコ」には地球全体も入りますが、宇宙の広がりまでも入りますし、また人間の体の内部までも入ります。環境とは言えないとは思いますが、体の内部つまり遺伝子と申しますか、自分の体内まで人間は今、支配することができるようになってきています。それから、人間の行為の及ぶすべてですから、文化も入ります。そういう宇宙から人間の内部にまでおよぶ広い範囲での倫理がエコエティカです。

「そんなところに倫理って」とおっしゃるかもしれませんが、今、人間の遺伝子をどのように操作するかという問題に、倫理的な規定のようなものを作らなければ、大変なことになる可能性もごさいますので、このようなことは考えなければなりません。ですから、本来の意味での学際的な研究グループが必要なのですが、しかし、学際的な研究があるにしても、とにかく倫理学の方でしっかり原則を考えておく必要もごさいます。エコエティカの国際会議を私がずっと組織して、今年で二五回目になりますが、その時に必ず医学者とか物理学者とか経済学者とかそういう方々にも参加して頂いてはおりますが、基本的には哲学者の会になっております。そしてまだまだ作りつつある学問でございしますが、これからも一生懸命勉強しようと思っております。

Q…今日はありがとうございました。プリントの5のMのところですね。今日お話し頂いたところの大半は、我々の生活の現実というものに深く技術が関わっていて、そしてもう対面的な関係だけではなくて、一人の行動が広く多くの人々との密接な利益が関わるような、そういう場面での我々の生活のコンテキストというものをご指摘いただいたと思います。そして、先生はその技術連関という言葉をごさいます。要するにわかりやすく言えば、見知らぬ人との関わりということでごさいますね。プリントの上の方に、4の一番最後のところにも、アカウンタピリティーで委員会の倫理という、今まで私たちはですね、例えば人柄がいい人、穏やかである人はいいい人だこう思っているんですが、実際には私も多少人生を生きてきますと、その穏やかで落ち着いた方がですね、委員会の責任を取ると途端に頑固になったりですね、人の意見を受け入れなかつたり、要するに委員会としての責任を果たせないというふうな、そういう観点でその人を見るとですね、その人は決して道徳的とは言えない、倫理的とは言えないということが多々あるわけで、この二つの原則がぶつかることがあるんですね。この矛盾を我々は背負っていかなければならないと思うんですが、ちょっと先生のお考えをお聞かせ頂きたいなと思っております。

A…本当に今、おっしゃったようなことが一つの問題で、結局委員会は、世界中で、責任のとり方をまだ知らないと思うのです。特に日本の場合には、やめれば、それが無責任なやり方でも出処進退が清らかだと言うのですが、やめられた方は困ってしまいます。そうかと思うと、片づくまでは辞職致しませんと言って、片づけないで残っている人もいます。本当に難しい問題だと思えます。個人の場合は、レスポンスピリティーがその人にかかっていますから、誰もその人をその職に選んだのではない、自分が自分で、例えば自分がお金を欲しい時に自分が盗んだというのでしたら、その人が責任

を負うのは当然です。委員会の場合には、委員会全体が責任を負うというときには、やはり事後処理ということを考えないと、残された組織は困ります。ですから、アカウンタピリティーの大部分は事後処理をどうするかということであるはずなのですが、今までのところ、アカウンタピリティーは過去の失敗の言い訳に過ぎません。アカウンタピリティーという言葉が説明責任というよりも、逃げ口上になってしまっているような気が致します。これをどう考えるかということは私もわかりません。皆さんでやはりよく考えて頂かなければならないことだと思います。

不思議なことですが、レスポンスピリティーという英語やフランス語ができたのは一八世紀のことなのです。誰が作ったのか未だにわかりません。いろいろな人が論じ合って、ある問いに対して答えを出して、そしてその答えに應ずる、答えとして応ずることが大事だという考えから、英語とフランス語はほとんど同じ頃にできております。誰が作ったかわからない新しい言葉が、古代ギリシアにはなかった大事な徳目となっているのです。謙遜という言葉も古代ギリシアにはございませんでした。謙遜はキリスト教から出てきた言葉です。キリスト自身が語った言葉の中にはないので、キリストが作ったとは言えませんが、キリストの仲間たちの中で作られてきた言葉で、タペイノプロシューネーという言葉がそれです。タペイノプロシューネーというのは、直訳しますと「乞食の心構え」ということです。つまり本当の乞食だったら、乞食は差別用語で使ってはいけないと申しますが、そういう人は一円を恵んでもらっても「ありがとうございます」と言いますし、かじりかけのパンであつても「ありがたい」と言ってもらいます。「なんだ、一円か」とか、「かじりかけのパンなんて汚い」などと言って捨てるようであれば、本当の乞食ではありません。そういう本当の乞食のように、どんなに辛いことがあつても、これは自分を鍛えるために神が与えて下さった試練なのだというように考えて、その試練を受け取るような態度、どんな辛い運命でも神の恵みとして受け取る心がタペイノプロシューネーであり、やがてそれが「謙遜」という言葉になっていきました。

ですから、市民の一人一人が考えていけば、新しい徳目が人類のために出てくることになるでしょう。

Q…基本的な徳目として、正義、中庸、勇氣、節制についてのお話もございましたが、この新しい時代に、その古い基本的な徳目につけ加えると言いますか、今後、こういう方向でという何か示唆を頂ければたいへんありがたいと思います。

A…私どもの研究会でいろいろ論じております中で、やはり、よその国の人に対する愛、異邦の人、外国人に対して親切にすることが、グローバルな時代になると必要になってまいります。そのため知的な徳目の一つとして、自分の母語以外に、一つはよその国の言葉を使うようにすることが必要ではないでしょうか。もちろんこれは、才能や機会が許せばということですが、そういう勉強をする暇もない人には要求できないことです。また、外国語が必要だからと言って、ただすぐに英語を勉強させろということではなく、日本の場合には韓国語、ロシア語、フィリピン語のような、日本に近い国の言葉を、社会人になるためには大事にしておく必要があるのではないのでしょうか。

それから先ほど申しましたけれども、機械の時代でもありますので、何か一つの機械は、どんなに嫌いであってもマスターするようにしておいた方がよいように思います。例えば、車の運転が出来る出来ないとは、他人の命を救うことが出来るか出来ないかということに関わってくることもございます。ちょうど、自然だけが環境であつたときには、木登りが出来る方がよいだろうとか、泳ぎが出来の方がよいだろうということがあつたのと同じように、機械に囲まれた世界の中では、この機械ならあの男に頼もう、あの機械ならあいつに任せれば大丈夫だろう、というようなことがある方がよいのではないのでしょうか。そのような機械の習得が先ほど申しましたマキナスティケーです。

それから、これも私の考えの一つですけれども、人間は四度生まれるような気が致します。一度目は母親の胎内から生まれ出る時で、これは動物としての人の誕生です。二度目は、動物を脱して人間として生まれます。人間というのは人の間に立って話ができることが大事です。つまり、就園前の幼い子供はまだ話ができませんから、人の中に入れることができないと思います。幼稚園に行く頃で、言葉が話せるようになったら人間になったと言ってもよろしいでしょう。そして青春の頃になりますと、個人の趣味とか嗜好とか傾向とかが固まってまいりますから、その頃に個人として生まれると思うのです。これが三度目です。そして、四度目に生まれるというのは、社会人として生まれることなのですが、この四度目の誕生がまだうまくいっていないように思います。個人としての責任ということまではみんな学べるのですが、社会人としてということになるとみんな学び損ねているような気が致します。仲間内だけが社会と思うような、たとえば私も大学でしか仕事をしなかったものは大学以外に社会がないような考え方になってしましますし、政治家はやはり政治の世界しか知らないというようなことがありますので、社会人として生まれるということはどういうことなのでしょう。その時々にはエシックスがあつて、思春期から成人にかけての間に個人としての倫理は学べると思うのですけれども、私どもが社会人になってから、社会倫理ということの本当は学べていないのではないかという気が致しますので、それを私も含めて一生懸命求めていかなければならないと思っております。

### 【むすび】

ご熱心に聞いて頂いて、そして質問も頂いて、本当に嬉しゅうございました。私が若い時分に、フランスにおりました時、ある事情で毎週一度、小さなレストランで夕食をとつ

ておりました。その頃、月末の土曜日になりますと、お金がなくなりまして、その店で一番安いブレインオムレツを頼みまして、そして言わなくても良いのに、「今日は腹が減らないから」などと言いつつ食べていました。そのウエイトレスをしていた店の娘さんが、そつとパンを二人前、テーブルに置いてくれるのです。それで私は二人前食べて、お勘定をしようと思うと、いつもの値段なのです。「パンは二人前でした」と言ったら、娘さんが他のお客に聞こえないように「シツ」と言つて、一人前だけの代金にしてくれたのです。それで楽しい気持ちになりました。パリは九月になるともう暖房が必要で、一月になると電気がよく降る寒いところですが、そういう寒い日にもそのレストランに行きました。ちょうどお金のない貧しい土曜日です。その日もまた「腹が減らないから」と言つてオムレツを頼むのです。オムレツだけ持つてきてくれる。パンは二人前添えてある。そうしましたら、その日は、娘さんのお母さん、厨房で料理しているお母さんが、温かいオニオングラタンを持ってきて、「お客さん、注文を間違えて作ってしまいました。よかつたら召し上がって下さい」と言つて、「お客さん、注文を間違えて作ってしまいました。よかつたら召し上がって下さい」と言つて、テーブルに置いてくれました。満員になつても二〇人ぐらいの小さなレストランです。そして私がお腹が減っている時ですから、どのテーブルが何を注文したかくらいはちゃんと知っているので、ですから、客の注文を間違えているはずがないのです。でも、「あなたはお腹が減っているでしょうから、これいかがですか」と言われてもらうのと、「お客さん、注文を間違えたのです。よかつたら召し上がって下さい」と言われてもらうのとでは違います。ただ、それだけのことなのですが、心に深く刻まれた思い出の一つです。ですから、フランスでは辛いことはたくさんありましたが、フランスを嫌いになれません。今でもフランス人は生意気なのがなくて、腹立たしく思うこともございませんが、やはりフランスを嫌いにはなれません。

人類には、本当に人のことを優しく思いやるということが一番大事で、どれほど技術の世界になろうとも、思いやりの心を失つてはいけません。ところが、それが今、日本では失われているような気が

致します。思いやりの心を子供達に教えるために、今申し上げました話などを教科書の中に入れてしまうとしますと、こんなにお金がある自由の国でそんなものは子供に通じないだろうという親がいます。でもそうではないのです。子供はその話を読んで感動してくれているのです。ですから、人間が生まれながら持っている優しさを信じて、今の時代を、よい国そして同時によい世界にしていくようにお互いに努力したいと存じます。

今日は、皆さんがこのような熱心に学んでくださり、ご質問もして下さって、本当に嬉しゅうございます。御礼申し上げます。

(編集者注…本稿は、平成十八年二月二十五日に開催された、モラロジー研究所道德科学研究センター主催の「公開講演会」の内容を収録したものである。)